

P-105 妊娠中毒症の胎盤（特に間質細胞）
におけるコラーゲンⅢ、Ⅳ、Ⅴ型の発現について

札幌医大

山崎 清大、西川 聡、中村 拓実、宿田 孝弘、
山本 裕之、小泉 基生、早川 修、工藤 隆一

【目的】重症妊娠中毒症患者の胎盤におけるコラーゲン type Ⅲ、Ⅳ、Ⅴの発現を検討し正常妊娠胎盤との発現の違いについて検討した。

【方法】妊娠 36～37 週で分娩となった重症妊娠中毒症患者 5 例と同一週数で分娩となった正常妊婦 5 例の胎盤を 1 次抗体として抗ヒトコラーゲンⅢ、Ⅳ、Ⅴ型モノクローナル抗体を用い、ABC 法にて染色し免疫組織化学所見を両群間で検討した。また、胎盤をホモジェネイト後、電気泳動し、ニトロセルロースに transfer した。同様の 1 次抗体を用い、Western blotting 法を用い検討した。

【結果】中毒症 5 例、正常 5 例の各群はいずれも同様の染色パターンを示した。コラーゲンⅢ型では、中毒症と正常は、ほぼ同様であった。つまり絨毛間腔、間質細胞は弱陽性であり、トロホブラストは陰性であった。Ⅳ型では、正常に比較し中毒症では、絨毛間腔、間質細胞にやや強く陽性であったが、トロホブラストはいずれも陰性であった。Ⅴ型では、中毒症では、トロホブラスト、絨毛間腔、間質細胞はいずれも強陽性であったのに対し、正常では、すべて陰性であった。Western blotting 法にても中毒症胎盤は、Ⅴ型の強い発現が認められた。

【結論】妊娠中毒症胎盤では、正常胎盤と比較してトロホブラスト、絨毛間腔、間質細胞はコラーゲンⅤ型の発現が著しく違い、このことが胎盤の機能低下に関与している可能性が示唆された。

P-106 妊娠中毒症胎盤組織における
Interleukin-2 (IL-2) の局在に関する免疫組織化学的研究

東京大

原 直範、藤井知行、岡井 崇、武谷雄二

【目的】妊娠維持において、絨毛外トロホブラストと母体細胞との間でおこるサイトカインを介した免疫応答は重要である。正常妊娠では胎盤基板および脱落膜組織での IL-2 の存在は確認されていないが、脱落膜組織中に存在する大顆粒リンパ球 (LGL 細胞) は、IL-2 添加によるキラー活性の増強でトロホブラストを傷害する。そこで妊娠中毒症の病態に、胎盤局所、特に基板における IL-2 が関与している可能性を考え、妊娠中毒症例の胎盤組織における IL-2 の存在を免疫組織化学染色により検討した。【方法】正常正期産胎盤 (7 例) および日本産科婦人科学会の診断基準による重症高血圧を有する純粋型の妊娠中毒症例胎盤 (5 例) を分娩時に採取し凍結した。クリオスタットで作成した切片をアセトンで固定し、1 次抗体として抗ヒト IL-2 マウスモノクローナル抗体および絨毛外トロホブラストを標識するための、抗ヒトサイトケラチンマウスモノクローナル抗体を用い、Labelled Streptavidin Biotin 法により連続切片の免疫組織化学染色を行った。【成績】正常正期産胎盤および妊娠中毒症例胎盤の全例で、抗ヒトサイトケラチン抗体により絨毛外トロホブラストが明瞭に識別された。正常正期産胎盤では全例で IL-2 の染色は認められなかったが、妊娠中毒症例胎盤では 5 例中 4 例で、絨毛外トロホブラストの細胞質に IL-2 の強い顆粒状の染色を認めた。【結論】妊娠中毒症例において、母児接点の場である基板を構成する絨毛外トロホブラストに IL-2 が存在したことから、IL-2 を介した胎盤局所での母児間の免疫反応が妊娠中毒症の病態に関与していることが示唆された。